

# 木村 靄村（きむら・あいそん）

## 1、プロフィール

歌人。アララギに入会し、島木赤彦、斎藤茂吉に師事、県アララギの中心的歌人として活躍。書・画をたしなみ多彩な文化活動を行ったことでも知られる。

<生没>

1899(明治 32)年5月1日 ~ 1966(昭和 41)年2月 25 日

<代表作>

歌集『山村』(昭和 24 年)『日蝕』(昭和 30 年)

遺歌集『木村靄村歌集』(昭和 47 年)

<青森との関わり>

三戸郡階上村(現階上町)に生まれる。後に小中野(現八戸市)に移り住み、書店経営。八戸市文化協会長を務める。県文化賞受賞。

## 2、作家解説

木村靄村(本名忠蔵)は、明治 32 年5月1日、三戸郡階上村(現階上町)大字鳥屋部字田ノ上八番地に生まれた。明治 40 年、材木商を開業するため、一家は三戸郡小中野村(現八戸市)に転住するが、靄村は一人階上村に残り叔父の家に寄寓した。大正2年階上尋常高等小学校を卒業すると、同地で放畜と農業に従事することにした。ここでの生活は、後年の靄村の歌の源泉となる。

大正9年 21 歳の時、靄村は朝日歌壇へ投稿を始めた。そして、「牛を見失ひし嶮し山をあちこちと尋ねて小夜更けにけり」の歌が、選者の島木赤彦によって、「深く自然の呼吸に合したるところあるは、真摯なるひたすら心を以て事象に向ふが故なり」と評され、大いに感激した靄村は、終生短歌に情熱を傾けることになる。

大正 10 年、赤彦を慕ってアララギに入会した靄村は、本格的に作家活動を始め。

大正 15 年、島木赤彦が逝去した。その悲しみと、昭和2年、三戸郡小中野町（現八戸市）で書店を開業したことによる多忙とが重なり、一時期作歌を中断した。

昭和8年より作歌を再会、斎藤茂吉に励まされながらアララギに投稿、靄村が経営する木村書店の看板は、戦後茂吉が書き与えたものであったという。昭和 11 年、青森アララギに加わり、青森アララギの会員とは終生交わることになった。

また、地元八戸にあつては、戦前戦後を通じて暁星短歌会の指導的役割を果たし、戦後は昭和 21 年に歌誌「群山」、同 22 年には稲垣浩らと「陸奥短歌協会」を結成し歌誌「陸奥」を、同 28 年には歌誌「玄土」を創刊、昭和 33 年には八戸市文化協会長に就いた。

昭和 37 年、多年に渡る作歌活動・文化活動によって第4回県文化賞を受賞したが、この年の秋から高血圧症のため東京で避寒するようになり、昭和 41 年2月 25 日東京で亡くなった。奇しくも茂吉の命日であった。昭和 47 年、故郷階上岳大開平に「乳吞ます牛のまなこにふるさとの山はさかさまに映りてみけり」の歌碑が建立された。

### 3、資料紹介

○『日蝕』

図書

1955(昭和 30)年6月 30 日

185mm × 130mm

第二歌集。昭和2年から昭和 19 年までの歌を収録、ほとんど茂吉の選を経たものである。同門の佐藤佐太郎が序文で、「木村氏の歌は必ずしも尖鋭ではないが、時に切実である」と記している。牧歌的抒情を基調とした歌、書店主としての生活詠歌が多く収録される。